

震える舌 三木 卓



震える舌

昭和五十年一月二十五日初版印刷

昭和五十年一月三十一日初版発行

著者 三木卓

装幀 司修

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京) 一〇八〇二 電話 二九一―三七一一

印刷 中央精版

製本 小高製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

震える舌

隠元豆の莢ぐらいの太さの幼い指が、匙を握っていた。二人の大人が、それをじつとみつめていた。

「さ、すくうのよ。まあちゃん」

邦江がいった。白い粥へ向って匙が降りていき、すくいあげると宙に浮いた。それきり動かなかった。

蜜柑色の朝の光が、高層共同住宅の窓枠の影を三角形にして床の上に投げていた。三人がかこんでいるのは小さな食卓だったので、部屋は広く見えた。取りまいているのはコンクリートの剝き出しの壁だった。壁はガスの焰と暖房のために淡灰色の膜におおわれ、うっすらと濡れていた。壁の尽きるところに四角い穴があいていて、そこ

には独房のような覗き穴のある鉄扉が、蝶番でとりつけられていた。壁と人のからだのあいだには煖房の吐き出した濃い熱があった。熱は幾重にも層をなしていた。

匙を握った顔は、目を閉じた。決してわたしを見ず、匙を見なかった。まぶたが一、二度、ひきつれるように動いた。匙の尖端が大きく揺れ、見たこともないような模様をせわしく描き出した。それを見ていると、頭がふらつくのを感じた。

「さあ、食べて」わたしはできるだけ感情を殺した声でいった。「食べないと、みんな天神さまの鳩にやってしまいますよ」

昌子は蒙古人風の一重まぶたを引きあげ、上目づかいをしてわたしを見た。目はすこし充血していて白目の部分に赤いところがあった。そのはずみに匙はびくりと動き、粥汁が食卓の上にしたたった。

「あらあら」邦江がわざとらしい声でおどろいたようにいった。「そんなことして持っているから零れてしまうのよ。お口に入れて。お口に入れて」彼女は手を伸ばし、布巾で手早く食卓の汚れを拭いた。そのあいだ、匙は動かなかった。「さあ、まあちゃん」邦江はまったく同じ調子でいった。こんないい方でこどもがいうことを聞くは

ずがない。わたしは塩じゃけをほぐしながら、自分からもう一声掛けようかどうかどうしようかとためらっていた。

邦江は匙を握っている昌子の手に、自分の手をそえた。匙は動かなかった。邦江の顔が強ばり、昌子の顔を覗きこむようにした。昌子は母親を見かえさなかった。匙に近づくまい、という素振りを見せた。「食べない気？」邦江がきつい声でいった。「お粥食べたいていったの、あなたじゃないの。つくらせておいてどうするつもり？」昌子はますますからだを強ばらせ、身体を食卓から遠去けようとした。邦江は溜息を吐き、暫く様子を見ていたが、やがていった。「それじゃ、おかか、かいてあげましょうか？ 猫ちゃんごはんにする？ それとも生玉子おとそうか？」昌子はなにかいおうとして口を突き出した。しかし唇がわずかに動いただけで声は出なかった。いいづらそうにためらっているうちに匙が傾き、粥は勢いよく食卓の上に流れおちた。

「馬鹿。まぬけ」わたしは怒鳴った。昌子の頬の筋肉が緊張し、からだが危険に對していつでも逃れられる態勢にはいったのがわかった。「いいかい。それじゃ、お尻ぶっちゃうよ」立ちあがった途端、昌子の隠元豆の莢の太さの指がひらき、匙は食卓の

上に落ちた。そして、けたたましい響きをあげながらはずんだ。昌子は両手をスカートの尻にあて、打たれまいとして椅子ごとうしろへさがった。「ぶつよ」わたしは意地になっていった。「さ、こっちへおいで」わたしは意地悪く手招きした。「おいで、おいで」

昌子は猫が蹲ってふりむきざまに見上げているときの恨めしそうなまなざしでわたしを見上げた。肉体的な力が対等だったら決して許しはしないのだが、という目の色だと感じた。わたしは近づいていこうとしてためらい、睨みあった。「あなた。ねえ。あなた」邦江が制止を求めるような声でいった。「いいわね。まあちゃん。すこうしだけでも食べましょうね」それからわたしの方を振り向くと「すこし昌子、風邪気味なのよ。だから」と、とりなし顔でいった。「ああ、そう」そのいい方に非難めいた調子がふくまれているのに気づいて苛々しながらいった。「それじゃ、なおのこと余計食べさせなければ駄目じゃないか」「そりゃそうですけれど」邦江はいった。「口のなかに何かできているらしいのよ。だから口を開けたがらないの。今朝お粥にしたのもそのせいなの」「口のなかに？　何かできた？」

「そうなんです」邦江は当惑の感じられる声の調子でいった。「でも、なんだかよくわからないの。だって、ほら、この子をまずお医者の前へつれていくのが一苦勞でしょう。やっとの思いで昨日、連れていったのよ。でも口なんか開くもんですか。お医者だって面倒ですからね。へああ、そう。それじゃいいです。いいです」ってまあ、こんな調子でおしまいになっちゃったの」「そう」席にもどったわたしは、うつむいて塩じゃけの骨を箸でつつきながらいった。薄い肉桂色をした肉は渦巻き状の縞目に沿ってもろく剥がれおちた。灼熱した金網にあたった部分は焦げてふくれていた。これはさっき、わたしが念入りにガスの焰で焼いたのだ。ちょうどいい焼け具合になったところでぬかりなく火を止めた。だからいい匂いだ。わたしは塩じゃけの背骨の丸い穴に箸先を押しこんで怒りをこらえた。怒りは鎮まってきた。箸はなかへは入らなかった。肉の色が淡くて、いかにも辛塩という感じがしたので、塩はきつと骨の髄までしみとおっていると思った。塩漬けというのはいい保存法だ。かけらを飯の上にのせてかきこみ、よく噛んだ。魚肉は大白歯のあいだですりつぶされ、味がにじみ出でてきてうまかった。

「歯はちゃんと磨かせているのか。そうじゃないんだろう」わたしは、剥がしたしゃけの皮をまるめながらいった。「歯茎が化膿しているのかもしれない。虫歯が痛むのかもしれない。歯は大切にしなければ駄目だぞ、とくに女は」「ちゃんと毎日磨かせています」邦江は抗議のこもった声でいった。

そういえばまだ今日は昌子の声を聞いていない、と思った。彼女はわたしが暴力をふるう気持のなくなつたのを察知して尻から両手を離し、椅子に坐っていた。何かざごちないものがあつた。頬が腫れてでもいるのだろうか。注意深くながめて見たが、そんな様子はなかった。「どれ、父さんにちょっとお口をあけて見せてごらん」わたしはできる限り優しい声でいった。「どっちがわが痛いんだい。こっちかい？ それともこっち？」

「いや」咽喉の奥から、かすれた、微かな声がようやくとどいてきた。吠えすぎて咽喉を駄目にした弱い犬のような声だった。かすかに震えていた。「いやよ。あたし」その声におどろきながらわたしは続けた。「ほっぺたを噛んだのかい？　ときどきやる、あれさ。父さんなんか、よく急いで食べようとして自分のほっぺたまで食っちゃ

「たけれどさ」昌子は、じつとわたしの口もとを見つめて黙っていた。わたしはまた苛々しはじめた。「それとも、新しい歯が生えてきたのかな？」「わかんないよ」また、やっと聞きとれるぐらいの、咽喉の奥からの声だった。唇をあまり動かさないの
で腹話術をやっているように見えた。「そうかい。そうかい」わたしはいった。「それ
じゃあね。父さんがちゃんと見て、それで悪いところを見つけてあげるからね。お口
をあけててごらん。そしたら、直してあげられるからね」

昌子はわたしを見上げた。口をあく気になったのだろうか。そう思って微笑する
と、それにこたえるように、まなざしに一瞬、かすかな焰が閃いたが、すぐに消え
た。「お口なんか、あげたくない」他人のような声がした。わたしを信頼しようかと
思った気持はたちまち消え失せてしまい、今は、よそよそしくふるまう心だけになっ
ていた。昌子はわたしを信じなかったのだ。それが氣に入らなかったのも、わたしは
両手を伸ばし、その頬にふれようとした。しかし彼女は、身体をひねってそれを避け
た。瞬間、昌子のわたしに対する嫌悪が、炒り豆がはぜるようにはじけ飛ぶのがわか
った。

「わかったよ。いいよ。おまえさんの純潔を守りたい気持は尊重するよ」わたしは仕方なくいった。これ以上昌子とたたかう気にはなれなかった。「熱をはかってみてくれ」邦江は頷いた。「きつと歯茎が化膿しているんだと思う。放つという敗血症にでもなられると困るからな。クロマイでも打ってきてもらってくれよ。必ず」

「はい」邦江はそういうとスプーンをとりあげ、粥をすくい、昌子の口までもっていった。すると昌子は微かに口をひらいて粥を受け入れた。邦江はまた一匙はこんだ。昌子は受け入れた。自分の手では食べられないときでも、邦江が箸ではさんで口まで持つていつてやると食べた。邦江が甘やかしてつけてしまった習慣だった。そうでもしなければ食べたがらない、ということも事実だった。邦江は、自分のつけてしまった習慣に縛られて苦しんでいた。昌子は、人になにかをしてもらうのが好きな子で、放っておかれるとわざと小便を洩らしたりするのだ。

「昌子。調子が悪いからって甘えるんじゃない。自分で食べなさい」自分でもおどろくほどの冷たい声だった。蜜柑色の陽を浴びて輝いていた匙が母親の手からふたたび娘の手に渡された。邦江は非難めいたまなざしでわたしを見た。わたしは知らぬふり

をした。

匙を持った指は、ぎごちなく匙とからみあっていた。匙はぶるぶる震えながら宙に浮いていた。その指先は小指をのぞく四本とも皮膚を自分で剥いてしまったために指紋を失っていて、つるつるになって光っていた。正常な皮膚との接点には、波紋のようになった皮の切れ目が幾重にもあって、暗い縞をつくっていた。わたしは湿った木箸で木椀の内側をこするときのような感覚が背筋をゆっくり這いあがっていくのをおぼえた。指には微細な知覚神経がびっしりと集中しているのだ。剥がれた指は宙に浮き、世界にむかって晒らされていた。数本の指には赤黒い血痕がこびりついていた。

へなぜこんなことをするのだろう？わたしは不快な感覚に堪えながら片手を背中にまわし掌をあてることで、身をおちつけようとした。指は匙にからんでいて粥汁をあびていた。汁は皮膚の切れ目から肉組織のなかへ滲み入っていると思われた。わたしは背中をゆっくり掌でこすりつづけた。掌の熱が移動していくのがわかった。その感覚はわたしをわずかにおちつかせたが、掌の去っていった場所は、また熱が放散していくにつれて以前の感覚がよみがえってくるのだった。

掘げられている昌子のもう一方の指を見た。指は同じように剥かれていて肉があらわれていた。そしてこぼれた味噌汁につかっていた。わたしは咽喉にこみあげてくるものを押えた。へ今夜から手袋をしっかりしぼりつけようわたしは強く思った。へ今夜からぜったい手袋をしぼりつけるぞ

匙は震えながら上にあがっていき、唇にあてられた。しかし開かなかった。「口をあけて」わたしはいった。昌子は眼を睜った。「口をあけるんだよ」わたしはいった。唇が微かにあいて匙がくわえられた。眼が悲痛感をあらわしていた。粥は流しこまれた。涙が一粒、こぼれおちた。

それ以上要求する気にはなれなかった。わたしは額の汗をぬぐった。「すこし部屋が暑すぎないか」わたしはいった。「そうかしら」邦江は合点が行かない、という声でいった。「わたしにはちょうどいいけれど」「頭があぶられて馬鹿になりそうだ」わたしはいった。こんな部屋では、肉や魚はバクテリアのいい繁殖場だ。わたしは冷蔵庫のなかにある、赤く染められた鱈子や鶏の内臓のことを思い浮べ、野菜籠のなかの玉葱が匂いはじめていることを思った。そして邦江をみつめることで返事をうながし

たが、彼女はそれに気付いたのか気付かないのかわからぬ表情で黙っていた。しかし、わたしは、邦江がこの温度を好んでいることを知っていた。

「今日、もう一度医者につれて行ってほしいんだ」わたしはそういいながら立上って換気扇のモーターにスイッチを入れた。「部屋によく湯気をたてて寝かせてくれよ。風邪もひいてるから」「そうします」邦江は、わたしの動作を目で追いながらいった。わたしはネクタイを締めながら、自分が出ていけば邦江はすぐ換気扇を止めるだろう、と思った。

午後、急ぎの校正の仕事をとどけてもどってきた。底冷えのする二月の早い夕闇のなかを淡い影になって通り抜けていると、路はしなった不細工な釣竿のようにたわんで、彼方へ消えていた。わたしはその上を歩いている熱い液で満たされた袋だった。そこで裂けてしまえば、寒気は流れ出したかたちのままわたしを凍結させる。以前に見た女の死者の手を思い出した。手だけがむしろからはみ出していた。いや手だけで

はなかった。蛇行してむしろから逃れ出、あちこちに溜り場をつくった液が、もう動くことを止めて、そこにあった。あとは土に吸いこまれていくだけだ。わたしは袋だ。毀れてしまったらもとにもどらない。

螢光灯のまばゆいホールへ入ると吐息が出た。エレベーターのなかは着漬した襦袢やすりきれた毛布の匂いがした。自宅の鉄の扉をあけると、昌子が食卓の椅子に腰掛けているうしろ姿が見えた。

すこしはよくなったのだろうか。靴を脱ぎ、あがるとすぐ「どうだい、まあちゃん」といった。「お医者さん、注射しただろう。泣いたかい。泣かないよな」昌子が振りむかないので、わたしは洗面所へ行って手と顔を冷たい水であらった。「父さんなんか、馬にするようなふつとい注射をしたことあるんだから。お馬の注射だぞ」わたしは、しゃべりつづけた。「父さん、注射器見て、あんまりでっかいもんだから、びっくり仰天してスタコラサッサと逃げ出したんだ。そしたら婦長先生が馬の注射器持って追いかけて来てヘコラ、待てエ」

タオルで顔を拭いて振りかえると、昌子のうしろ姿は、這入って来たときのまま、